

# 3人の 生き方から 考える

## 世界に生きることの価値、 世界に生きる人に必要な力

「日本はグローバル化を迫られている」と言われる中、次代を生きる生徒たちが、主体的に「世界に生きる」ためにはどんな価値観、力が必要なのだろうか。さまざまな場所に暮らしながら、世界の中で生きることを楽しむ3人の生き方から考える。

### 新興国ベトナムで気付いた 日本人だから出来る世界への貢献と 新しい幸せの価値観

ハバタク株式会社 取締役・アジア地域統括 おはらよしただか 小原祥嵩

#### 世界での日本人の 価値が問われている

ハバタク株式会社のベトナム支社の主な業務は、大きく2つあります。1つは、ベトナムを中心とするメコン地域への進出を検討する日系企業向けのコンサルティングで、ベトナムの市場調査や会社設立時の支

援などを行います。もう1つは、ベトナムで起業を考えている個人を対象としたビジネス開拓ツアーの企画・運営です。約1週間、ベトナム人の家にホームステイをしながら、ワークショップなどを通して、現地目線でベトナムを理解し、ビジネスアイデアを創発することを目的としています。

2011年からベトナムを拠点に

活動していますが、元々、私はコンピュータ分野の多国籍企業の日本人に就職し、組織や業務改革の支援を行うコンサルタント業務を担当していました。しかし、リーマン・ショックにより、それまで以上にコスト削減が推し進められるようになると、日本人コンサルタントは、より安く雇用でき、しかも同等の仕事をこなせる新興国のコンサルタントに仕事を奪われ始めたのです。業界動向をレポートにまとめるなど、従来ならば日本人の若手社員が担当していたような仕事は、どんどん外国人に任せられるようになりました。

時間とお金を掛けて日本人を育てる余裕のなくなった企業にとって、それが合理的な選択であることは理解しつつも、世界の市場で日本人が価値を失いつつある現状を、私は悔しく思いました。これまで日本で評価されてきた能力やスキルが時代に合わなくなってきたのではないかと、日本人が世界で再び存在感を発揮するためには教育のあり方を見直す必要があればいけないのではないかと考えるようになり、独立への気持ちが高まっていったのです。

#### 社会が変化する今、 日本人も変わるべき

今、日本企業でも海外人材の採用を行うところが増えています。「海外の学生は、日本の学生よりも意欲的で優秀だ」という言葉もよく耳に

します。確かに私もそう感じることはありませんが、もちろん全ての外国人学生が優秀なわけではありません。グローバル企業に就職するために、日本人学生と限られた席を巡って競うような学生たちは極めて優秀だ、と言うべきでしょう。

では、なぜ彼らは優秀なのでしょう。ベトナムでは上昇志向を持つ学生は、最初から外資系企業を狙っていて、国内企業に目を向けていません。自分の力でより高い給料、より物質的に豊かな生活を獲得するというハングリー精神があり、だから大学での学びに対しても積極的なのです。新興国であるベトナムには、皆と同じように勉強して就職すれば、とりあえず一生安心して暮らせるような社会、つまり日本のような社会はまだないからです。

逆に、日本の若者が海外の学生に比べて積極性に乏しいのは、先人たちの努力でつくられた豊かな社会で生きてきたからといえます。若い世代の1人として、私はそうした社会をつくってくれた先人たちに深く感

謝しています。しかし、社会状況が変わった今、否が応でも海外の若者と競い合わなければならなくなっているのも事実です。日本人はこのような現実を受け止め、変わらなければいけない部分もあると思うのですが、危機感を持っている人はまだ少ないように私は感じます。

### 日本人は世界に誇る ソフトパワーを持っている

特に教育にかかわる人たちは、これからの日本人が世界でどういう価値を発揮できるのか、真剣に考えなければならぬと思います。確かに「読み・書き・計算」のような基礎学力の面では日本の教育は今でも優れていると思いますが、社会で求められると思っているのは、与えられたことだけを正確にこなす人材ではないことは周知の通りです。自らビジョンを描き、未知の世界に飛び込める力、自らの足で泥臭く走り回れる強さを育めるように、日本の教育は変わらなければいけないでしょう。

しかし、日本人には世界で活躍する上での強みもあると思います。日本人が伝統の中で身に付けてきた気遣いやもてなしの心、道徳心です。実際、ベトナムの人たちに「外国人が経営する企業で働くなら、どの国の会社がいいか」と聞くと、大抵の人は「日本人の会社だ」と答えます。従業員を家族のように大切に扱い、ビジネスにおいてもモラルを重んじる日本人の精神性の高さは、海外でも尊敬を集めていて、これからも武器になるはずですよ。

これまで日本は、ものづくりの技

術で評価されてきました。しかし今、日本製品は韓国製品などに取って代わられています。単に機能的に優れたものづくりでは、コスト面でも新興国に勝つのはこれからも難しいでしょう。だからこそ、コスト以外の価値、「日本人らしさ」というソフトパワーを付加価値として更に高めることが重要だと思っております。

### 新興国に対して日本だから 出来る貢献がある

今、ハバタク株式会社



おはら・よしたか

◎ 1982年兵庫県生まれ。兵庫県西宮市立西宮東高校卒業。大阪府立大工学部卒業。同大学院工学研究科修士課程修了。多国籍企業の日本法人に入社し、戦略コンサルタントとして複数業界・業種のクライアントに対する組織・業務変革の支援を行う。2010年、2人の同僚と共にハバタク株式会社を東京都千代田区に設立。2011年にベトナム支社を開設し、ベトナムに赴任。

## ハバタク株式会社ベトナム支社の事業



◎ベトナムでは今も燃料として炭を使用しているが、多くの炭は燃焼効率が悪く、排気設備が不十分な家屋では人体への悪影響が懸念されている。従来の燃料よりも燃焼効率が良

く、環境への負荷も少ない燃料がベトナムでも開発されているが、それをビジネス化するノウハウが現地にはない。そこで、日本の中高年層が持つ技術やノウハウを、日本の若者が媒介になって新興国に伝えるという事業モデルが構築された。



◎日本から参加したメンバーが、ベトナム人メンバーと「ビジネスを通じた社会貢献」などについて語り合う。「海外に進出するにはビジネスのアイデアも大切

ですが、最後はやはり人です。日本のやり方をそのまま持つのではなく、日本人との違いを認め、現地の人から学ぶ姿勢を大切に出来る人が成功していると思います」(小原さん)

などの新興国を舞台に最も注力をしている新たな事業は、社会革新に取り組む新興国の人々と、日本の中高年層、そして若者の3者が世代を超えてチームになって社会的な課題に取り組み、というものです。

ベトナムにも、ビジネスを通じて環境問題や都市問題の解決に挑戦したいと考える人は大勢います。しかし、例えば環境への負荷が少ない新製品を考案しても、それを効率よく生産し、流通させるビジネスノウハウを持っていないことが多々ありま

す。そうしたノウハウは、経験豊かな日本の中高年層であれば提供できますが、家庭を持ち、本業で大きな責任がある立場の彼らにはあまり時間がありません。そこで、フットワークが軽く海外に行きやすい日本の若者がノウハウを伝える媒介になり、新興国で新しいビジネスに取り組む体験を積む。国境と世代を超えて、立場の異なる3者がそれぞれ出来ることを行い、やりがいや経験を得意にしようというものです。

急速に成長を続けるベトナムです

が、だからこそ、新しい課題も数多く発生しています。かつて同じように経済成長を遂げ、そうした課題に向き合ってきた日本だからこそ、今、ベトナムが抱える問題の解決に寄与できるのではないかと、しかもそれを日本人自身にとっても喜びに出来る仕組み、それぞれの人が無理せず社会貢献できる仕組みがあるのではないかと……そう考えたのです。

### 前向きな気持ちで海外に足を踏み出してほしい

私は、海外でものを売ることだけがグローバル化ではないと思っています。知恵や思いやりの心で、外国の人と新しい価値を持続的な仕組みの中でつくり上げていく。日本人の強みを生かして、新興国の人たちの生活を物質的にも精神的にも豊かにすることで、お金を稼ぐことは別のやりがいや達成感を味わう……これは、日本人ならではの国境の超え方ではないでしょうか。

若者は、海外に出ることで日本の良さを再発見します。もちろん私もそうでした。自分を育ててくれた素

晴らしい国、日本に何か貢献したいという気持ちはどんどん強くなっています。また、海外で培った力や課題解決のモデルは、日本で生かすことも出来るはずです。グローバル化が進めば人材は循環すると、私は考えています。日本の若者にとって、世界を意識する必要性が生じているのは事実です。けれども、必要に迫られていることだけが世界に出る理由ではありません。人や文化との出会いなど、海外でしか味わえない感動がたくさんあることも、大きな理由になるはずです。

ベトナムのような新興国に身を置けば、日々成長する社会を実感できますし、資本のない若者でもチャレンジすることが出来ます。更に、物質的な豊かさとは別の、より人間的な幸せの価値観にも出会えるでしょう。日本のようにものは豊富になくても、家族との時間を楽しみ、笑顔で暮らすベトナムの人たちを見て、こういう生き方もあるのだと私自身、初めて気が付きました。今まで知らなかった新しい価値観や幸せの形、生き方の選択肢が見える可能性も海外にはあるのです。

# 「同じ人間」のために 国境を超えて 大切な命と向き合う

国境なき医師団 アドミニストレーター 辻坂文子



## ハイチ、南スーダンの 人道援助に参加

非営利で民間の医療・人道援助団体である国境なき医師団(MSF)は、誰からも干渉や制限を受けることなく、国境を超えて危機に瀕した人々への緊急医療援助を行っている。2012年現在、世界28カ国に事務局があり、各国からの医師や看護師など約6500人の外国人派遣スタッフが、現地スタッフと共に70の国と地域で活動中です。人種や政治、宗教を問わない、独立・中立・公平の原則に基づいた援助活動が評価され、1999年にはノーベル平和賞を受賞しました。

私はこれまでハイチ、中央アフリカ、南スーダンなどでMSFのアドミニストレーターとして人道援助活動に参加してきました。アドミニストレーターとは、現地スタッフの雇用や給与の支払い、研修などの人事管理、プロジェクト全体の予算や経理などの財務管理を担当する役割のことです。MSFから派遣されるチームは、医師や看護師の他に、助産師や薬剤師、臨床心理士、更に、薬やワクチンなどの手配、水や食料の確保、診療所やトイレの建設などを担当するロジスティシャン、そして私のようなアドミニストレーターなどの外国人派遣スタッフで構成され、現地で採用したスタッフと共に活動を行います。

## 過酷な環境で行う 現地での仕事

12年5月から半年間、私は南スーダン共和国で、MSFの「母子保健医療プロジェクト」に参加しました。子どもと妊産婦の死亡率を下げするため、外国人派遣スタッフ約20人に加え、現地で200人以上のスタッフを雇いながら、200床以上の病院を維持しました。

現地の環境は過酷です。気温は日中50度に達する季節もあり、1日6

リットルの水を飲んでも体が渴いている状態です。食材が乏しいため、食事は5種類くらいのメニューが何カ月も続きます。現地の人たちと比べればはるかに恵まれた食事なのですが、私たち外国人派遣スタッフにとってはかなりつらいです。

現地で採用したスタッフを育成するのも簡単ではありません。内戦が長く続いた南スーダンでは、人々に教育を受ける余裕がこれまでなく、簡単な計算や読み書きが出来ないスタッフも多くいました。「仕事をする」「責任を果たす」ということの



つじさか・あやこ

◎1976年愛知県生まれ。愛知県立一宮高校卒業。慶應義塾大文学部卒業後、同大法学部に学士入学。フランスへの交換留学を経て、卒業後、国境なき医師団日本の広報部に就職。その後、退職し、青年海外協力隊としてベナンへ。イギリスの大学院で人道援助を専攻した後、国境なき医師団のアドミニストレーターとしてハイチ、中央アフリカ、南スーダンなどで活動する。

意味を理解してもらおうのに苦勞することもあります。

12年の南スーダンはマラリアの流行期間が長く、3〜8月にMSFが入院させた子どもは1000人以上と、前年同期の3倍に達し、仕事量はおのずと多くなりました。MSFの方針として、私たちは週末の休みとは別に3カ月ごとに約1週間の休暇を取得することになっていますが、南スーダンの活動では、それが必要ならば心身共に健康な状況を維持できないほどでした。外国人派遣スタッフは職種に応じて定期的に入れ替わり、そして南スーダンのプロジェクトは今も続いています。

## 同じ人間として 自分に出来ることをしたい

任地での苦勞は相当なものです。それでも私たちが助けようとしている人たちのつらさとは比べものになりません。病院で栄養失調の子ども姿を見るたび、自分が何のためにここにいるのかを実感します。

私が世界の貧困や紛争に関心を持ったのは、中学生の時にインドネ

シアを旅行し、自分よりも小さな子どもが生活のために働いていることにショックを受けてからです。想像を絶する苦しみを目の前にして、自分も何かしたいという思いを抱き、大学卒業後、MSFの日本オフィスに広報として就職しました。

現地の様子を伝えるうちに、次第に私は、自分も現地で働いてみたいと思うようになりました。MSFが活動する国の多くは貧困、紛争や暴力といった問題を抱えています。そうした国で人々がどんな暮らしをしているのか、自分の目で確かめたいと思うようになったのです。一言でいえば、世界に対する好奇心です。

実際に活動して感じるのは、日本よりも貧しい国だから、人々はみな不幸かといえば、必ずしもそうではないということ。途上国の人たちが日本人には考えられないような環境で懸命に生きていくことに、私は素直に尊敬の念を抱きます。

しかし一方で、同じ人間なのに生まれた国が違うだけで、これだけ生きる境遇が異なることに強い憤りを感じます。私は日本にたまたま生まれたから、恵まれた生活が出来てい

## 国境なき医師団における 辻坂さんの活動



◎「日本には多くの社会問題に対して国が援助するシステムが存在しますが、地球上にはそうしたシステムが全く存在しない国もあります。MSFの人道援助の目的は、持続性のある解決というよりも、むしろ、今、目の前にある苦しみ、つまり死を減らすことなのです」(辻坂さん)



◎辻坂さんは、東日本大震災の被災地でもMSFのアドミニストレーターとして活動した。「正直に言うと被災した人たちに感じる思いは、海外の人に対して感じるものとは全く違いました。MSFの理念とは矛盾しますが、同じ国の人たちが家族や家をなくした様子を見た時、その悲しみに心から共感し、自分も当事者だと感じたのです」(辻坂さん)

写真上：◎MSF 写真下：◎Jun Saito/MSF

## 異なる意見に耳を傾ける力が 日本人にはある

べきだと思えます。

私は、自分の仕事を「自己犠牲」だと思つたことはありません。やりがいを感じるから続けているのです。自分が採用にかかわった現地スタッフが生きて働き働いているのを見る時に、大きな喜びを感じます。自分で望んだ仕事にかかわることが出来る私はとても幸せです。

ただ、価値観が異なる国で活動す

るのですから、援助を受け入れてもらえないこともあります。子どもの病気が治っていないのに、父親が西洋医学に対して拒絶感を示し、「こんなことをしても治らない」と言い出すこともあります。そんな時、私たちはそれぞれの社会の文化や風習を尊重するとしながらも、結果としてそれらを変えることを勧めているのか、あるいは、出来る限りの治療を行っていくのかと考えます。

同質性の高い社会に生きる日本人は、相手が同じ価値観を共有していると期待する傾向がありますが、それでは国際社会で異なる価値観に出会った時、どうすればよいのか分からなくなってしまう。

異なる価値観に対しては、お互いが「私はそうは思わない」と言い、その上で「どうして？」と聞き、考えを伝え合っていくことが大切だと思います。そのためには、自分と相手の差異に好奇心を持つことが必要です。そうして対話を続け、その時々目的に応じて、何を優先すべきかを一緒に考えるのです。

グローバル化する社会では、課題を解決するためには対話を続けるしかないと思います。外から見て「あのような考えは理解できない」と非難するだけでは何も変わりません。自分とは違うと思いつながらも、出来る限り尊重するしかないことも現実にはあります。高校時代からさまざまな価値観に触れることは、その土台づくりにつながると思います。

日本人は周囲の意見に迎合しがちだといわれますが、裏を返せばそれは「他人の話をよく聴く」ということであり、実際に海外では長所として評価されています。異なる価値観が向き合う現場で、人の話が聴けることは大切なコミュニケーション能力の1つです。普段、私は自分が「日本人」だと意識することはあまりありませんが、同僚から何でもないことに対して「文子は優しいね」と言われた時は、和を大切にしている日本の価値観が自分にも備わっているのだと感じます。日本人の特質を生かしながら世界に貢献できることはたくさんあると思います。

## 日本の小さな町での本物の交流が 多様な価値観を受け入れる グローバルな場になる

「ナガサキアイランズスクール・小さな世界学校」代表

小関 哲

### 長崎での教育旅行が 世界一の評価を獲得

「小さな世界学校」では、長崎県平戸島や小値賀島を舞台に異文化交流する研修旅行型の教育プログラムを企画しています。2007年、世界最大級の教育旅行組織「ピープルトゥピープル（PTP）」が国際親善のため、私たちのプログラムにアメリカの高校生約360人を派遣しました。2週間の日本滞在中、長崎県内で6日間を過ごすこのプログラムでは、彼らは美しい自然の中で漁や田植えを経験し、ホームステイをして日本の生活を堪能しました。更に、被爆者の体験を聞き、日本の高

校生や大学生と平和について語り合うなど、単なる観光とは一線を画す、「本物の日本」を体験しました。PTPはこの年、世界48コースに約2万7000人の学生を派遣しましたが、私たちが企画したプログラムは参加者アンケートで世界第1位の評価を獲得したのです。

### 世界、日本への貢献意識を高めた イギリスでの2年間

日本の市民、若者とアメリカの高校生が寝食を共にし、国際的な課題について話し合い、感動の涙を流す。私が企画したこのプログラムの源泉は、16歳の時に留学した国際学校 United World College (UWC)



おせき・さとし

◎ 1979年長崎県生まれ。16歳の時、長崎県立佐世保北高校を中退し、国際学校 United World College へ第25代日本人派遣奨学生として留学、Atlantic College (英国ウェールズ州) 卒業。京都大法学部を卒業後、平戸島・小値賀島などを拠点に、自然体験・異文化交流を取り入れた旅行型教育プログラムの企画を行う「小さな世界学校」を立ち上げる。

での経験にあります。

長崎県の平戸で育った私は、戦争の悲惨さを幼い頃から学校や家庭で学んできました。中学生になる頃は、友人と「どうすれば戦争がなくなるのか」を子どもながらに真剣に議論しましたし、社会科の授業で民主主義について学んだ時は、人間が重ねてきた歴史の重みに心から感動しました。日本の高校に進学しましたが、「若者の知性や感性、志を尊重し、若者が正義を前向きに追求する姿勢を育む教育を実現することなしに、より良い社会をつくることは出来ない」という考えが強まり、よりそうした環境を求めるようになって

たのです。その過程でUWCの存在を知り、取り立てて英語力があつたわけではない私は半年間、連日明け方まで英語の猛勉強を行い、奨学生資格を勝ち取ったのです。

UWCは、国際平和の実現に貢献するリーダーを養成する目的で、1962年に設立された国際教育機関です。毎年各国より数人〜数十人の若者を選抜し、奨学金を与えて世界12校のキャンパスで2年間の高度な国際人教育を提供します。世界の政財界人が理事職を務め、現名誉会長はネルソン・マンデラ氏です。

私が学んだイギリス校は、12世紀の古城が校舎で、世界中からおよそ

350人の仲間が集まっています。世界の政治や経済など幅広いテーマについて、年齢や国籍の区別なく、時には夜を徹して語り合った。地域の消防・救急やNPO活動の第一線を正規の有資格者として担ったりするなど、学生は皆、若者らしい感性と理想主義を存分に発揮しながら、それぞれの興味・関心を追求していました。若者の知力、体力、社会的意識は、しかるべき環境に身を置けば伸びていくものなのだと身を以て実感しました。

恵まれた環境で勉強する中で、どの国の若者も「自分たちは世界中の暴力や貧困、差別と戦うためにここで学んでいる」という意識を強く感じていったと思います。ところが、帰国後の日本では、「世の中をもっと良くしたい」という意識が希薄に感じられることが多々ありました。人間は本来、誰でも人の役に立ちたいと思っている。しかし、今の日本人は、どうすれば人の役に立てるのかが分からなくなっているのではないかと。UWCのような学校を日本でつくりたい……教育に対する私の夢が次第に大きくなっていきました。

## 国境を超えて語り合うことで地域の価値を発見する

平戸・小値賀での教育プログラムは、私の夢である学校づくりにつながるものですし、事実、そこにかかわるさまざまな人たちに成長や変化をもたらしています。

日本の小学校を訪問したアメリカの高校生は、「集団の中で互いを思いやる文化が素晴らしい」と日本の教育の良い面に気付き、被爆者の体験から「資料館で見た被爆者の写真が、優しかったホストファミリーのおばあちゃんと重なった」と戦争の悲惨さを自分の問題として考えられるようになりまし。

彼らを迎える日本人にも変化はあります。当初、「外国人にどう応対すればよいかわからない」と困惑していた町のお年寄りたちは、別れの時にアメリカの若者と手を取り合っで名残を惜しみ、再会を誓い合います。また、私たちのプログラムの運営の主力は、10代後半から20代前半のUWCの後輩らを中心とする若者ですが、日本人とアメリカ人学生を

## 「小さな世界学校」平戸島・小値賀島での教育プログラム



◎城下町の面影を今も残す平戸市、17の島々からなる人口約3千人の小値賀町を主な舞台に、異文化交流体験は行われる。小関さんが大切にしていることは「ありのままの生活の中にゲストを受け入れること」。実際、アメリカの高校生の心をつかむものは友情であったり、風景であったりとさまざま。将棋に興味を持ち、3日間の滞在中、ホームステイ先の「おとうさん」とずっと将棋をさしていた生徒もいたという。



◎アメリカの高校生と日本人の間をつなぐのは、UWCの後輩らを中心とする若者たち。「島の漁師とアメリカの高校生の心をつなぐためには、思い切った意識が出来るくらいの高い英語力が必要です。でも、その土台はやはり日本語です。感動をあえて別の言語で言うのですから、自分の中に感動の蓄積が必要です。だから、高校生には良い本を日本語でしっかり読んで、感動を蓄積してほしいですね」(小関さん)

橋渡しする彼らの活躍を見た地元の高中生・大学生が、その後、私たちの活動への参加を希望し、新たな有給スタッフとして活躍するなど嬉しい循環も起っています。私たちとの出会いを契機にUWCを目指し、合格した地元の高校生もいます。

今、私は、岩手県大槌町や陸前高田市など東北の市町村で活動する団体とも連携し、平戸や小値賀での成功ノウハウを東北の人々に伝える活

動も始めています。日本が震災をどう乗り越え、原発の問題にいかに向き合っていくのかについて、東北の人たちとの交流の中で海外の若者が学ぶ教育プログラムを、東北の人たちに引き継いでもらうためです。海外の若者にとっては、本物に触れ、心と心が交流する中で多くを学ぶ教育の場になるでしょうし、東北の若者にとっては、海外の人たちと語り合うことで、地域の価値を再発見す

る場になることを期待しています。

### 多様な価値観との出会いは地域にこそある

10代の頃、「世界の平和に貢献したい」と志した私が、現在長崎や東北の小さな町を拠点にするのは、世界に目を向けなくなったからではありません。むしろ深い人間関係を築ける平戸や小値賀でこそ、世界に波及させられる「本物のモデル」をつくれるという思いがあるからです。小さな町での暮らしには、時に都会以上に多様な価値観の中で生きる力が求められます。職種や世代、受けた教育や価値観などが異なる他者と極めて近い距離で生活する地域は、人を、多様な価値と共に楽しく生きることが出来る「マルチカルチャールな存在」へと育てる最良の土壌です。一方で、大都市のグローバル企業に勤務する人が、同じような環境で働く人とは付き合ってしまうのはよくあることです。

グローバル社会は、多様なローカ

ルの集合です。身の回りの人々の多様性を深く知ることこそ、世界に通用する国際人としての素養だと思えます。そう言った意味で昔ながらの生活が残る地域は、実は若者にとって優れた国際人教育の場なのです。

交通機関が発達し、今は国境を超えた移動が容易です。でも、そうした時代だからこそ、1つの場所で腰を据えて多様な人と付き合い、深めることを大切にしたいのです。もちろん、海外に行くことを否定しているわけではありませんが、海外に行きさえすればよいというわけではありません。大切なのはそこでの体験の質です。私の場合も、イギリス留学が良かったのではなく、UWCという学校での体験が良かったのです。平戸や小値賀の漁師の言葉、長崎の被爆者の壮絶な体験に、アメリカの高校生が真剣に耳を傾けるのも同じことです。日本の地域にも良質な体験が出来る場所はたくさんあります。そこに職業や年齢、国籍を超えて多様な人々が集まったとき、グローバルな学びが生まれるのです。